

第1分科会「里山と森林・林業」

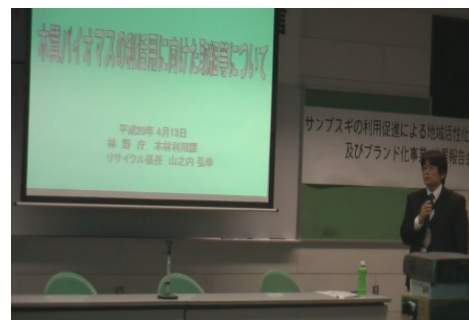
テーマ：バイオマスエコタウンの発信 第1部

日時：2008年4月13日（土） 9：30～12：00

場所：山武市文化会館 のぎくプラザ 視聴覚教室

参加者：63名

スタッフ：代表・稗田忠弘、記録・本間一夫、写真、
ビデオ・唐笠敦、鈴木剛治、石井 充、西塚健治、
阿部鐵則、鈴木一正、野嶋正宏、小川茂義、石橋義弘、
石橋正好、斉藤衛



内容

- 山之内弘幸（林野庁木材利用課リサイクル係長）
木質バイオマスの利活用に向けた取り組み等について
- 稗田忠弘（さんむフォレスト）
サンブスギブランド化と利用促進の現況と将来
- 荒尾稔・室原泰二
バイオマス・エコタウン発進への提言

趣旨

山武市は林業振興とバイオマスの活用に取り組み、地域循環型のまちづくりに踏み出そうとしている。サンブスギに代表される木質バイオマスや畜産バイオマスなど、多くの資源を持つ山武市のバイオマス利用の現況を明らかにし、将来への展望と課題を考える。

現状

森林荒廃の現状と再生

山武市はサンブスギの産地であり、かつては盛んな林業とそれにまつわる産業があった。暮らしと結びついて活用される森林は、燃料や肥料（堆肥）を必要とする人々によって枝打ちや下草刈り行われ、美林と呼ばれるほどに健全に維持されてきた。サンブスギは建築や船に用いられ、端材の一枚まで燃料として利用されてきたが、燃料構造の変化と安価な輸入木材の増加によって木材価額は下落し、産業としての林業は自立できない状態になっている。生活とも生産とも切り離された森林の多くは放置され荒廃の道をたどってきた。行政による林業振興の努力は長年にわたって続けられてきたものの、木材価額は低迷し林業家を元気づける効果は得られてこなかった。

しかし、近年環境面からの森林機能が見直され、木質バイオマスは地球温暖化防止に役立つ理想的な燃料として再評価されるなど、森林再生の機運が急速に高まってきた。



山武市の地域資源活用の取り組み

山武市では今年度からバイオマス推進室を設け、バイオマス資源の活用に取り組む姿勢を明確にした。サンプスギを使用した住宅に助成金を出し、サンプスギの利用促進を通じて森林再生に結びつける事業を立ち上げたほか、これから建設する学校の内装にサンプスギを使用し、さらに冬の暖房にペレットストーブを採用するなど積極的な施策を打ち出している。



民間の地域産業再生運動

民間では有限責任事業組合（LLP）グループ「木と土の家」が発足し、サンプスギによる地域循環型の住まいづくりを地域産業として成立させる活動を始めた。この LLP は住まいづくりを核に、薪ストーブやペレットストーブで残材をエネルギー利用し、木材を使いきることを提案しており、結果として現代のテクノロジーを媒介にして、暮らしと森林を結びつける仕組みをつくらうとしている。行政の施策を実施するにあたり、それに応える民間の体制が整備されていることは重要である。



課題

山武市がこれから建設する公共建築に地元の木材を使用し、その残材をペレットにして冬の暖房に利用する、という単純な地域循環の仕組みも、素材を供給する民間事業者との連携がなければ実現できない。

まとめ

- ・ サンプスギによる住まいづくりを核に、森林と暮らしを結ぶ仕組みをつくり、自然、産業、経済の循環する地域をつくる。
- ・ 住まいづくりの結果発生するサンプスギ残材をエネルギー利用して資源の循環を完結し、山林の保全と活用に結びつけて山林の多面的機能を守る。
- ・ 行政は地域の資源、人材を積極的に使う努力をする。
- ・ 民間事業者は事業を通じて地域貢献する「なりわい」を実践する。
- ・ 持続可能な資源循環型の地域社会をつくるという共通の目標をもって行政と民間の役割を自覚した協力関係を築く。

